

論文の内容の要旨

論文題目：道徳の時間における児童の資料理解にアナロジー推論が与える影響
—類似状況を利用した支援方法の検討—

氏名：三輪 聡子

本論文は、小学校6年生の道徳の時間における児童の学習過程を、個人内の推論過程や他者との相互行為に着目して明らかにすることを目的とする。道徳の時間において、児童は資料や自身の生活経験といった学習材を通して、道徳的価値に関する理解を深めている。その過程では、資料解釈のみならず、資料を通して児童が自分自身の行為を振り返るという高度な認知的活動が必要となる。しかし、道徳の時間における児童の学習過程に対して、認知心理学的な観点から十分な検討がなされてきたとは言えない。IV部10章構成の本論文は、アナロジー推論を中心とする認知心理学の知見を手がかりとして、道徳の時間における児童の学習過程について明らかにするものである。

本論文の第I部第1章では、資料を用いた基本形の道徳授業に着目し、その指導法の問題点を導出した。そして、道徳教育に関する研究上の課題を概観した上で、資料理解において(a)児童の個人差が生起するメカニズムが明らかになっていない点、(b)資料と児童の生活経験を関連付ける支援方法が十分に検討されていない点、の2点を基本形の解決すべき問題として挙げた。また、第1章では、(a)の課題である個人差という観点から、道徳性発達の研究を概観し、読み取る動機に道徳性の個人差が現れる点を示した。そこで、(a)の課題を、(a')道徳授業内での児童の動機の読み取り過程について明らかにする必要性、と捉え直した。そして、道徳の授

業研究ならびに読解研究を概観する中で、道徳授業内での動機の読み取りに対する支援方法については十分な検討がなされていないことを指摘した。第2章では、アナロジー推論に関する研究の概観を通し、前述した(a')及び(b)の検討課題に取り組む上で、道徳の時間における学習過程は、既知の事柄（自分の経験）から未知の事柄（資料の登場人物の不可視の動機）を推測する、アナロジー推論の枠組みで捉えることが有効であることを指摘した。また、アナロジー研究に関する課題として、授業文脈でのアナロジー推論において、学習者がどこにつまずき、またそのつまずきを克服しながら学習していくのかという学習過程を明らかにする必要性についても言及した。第3章では、これらの課題を具体的な研究上の課題として整理し、(I) 児童による登場人物の動機の読み取り過程の解明、及び、(II) アナロジー推論を用いた動機の読み取りの支援方法の提案、の2点を本論文の研究目的とした。

第II部（第4章～第5章）では、動機の読み取りがいかに読み物資料解釈に影響を与えるのかについて実証的に検討をおこなった。第4章（研究1）では、小学校6年生の1学級（ $n = 34$ ）を対象に物語解釈課題を実施し、動機の読み取りが道徳的な物語の解釈に及ぼす影響を検討した。その結果、先行研究（e.g., Owens, Bower, & Black, 1979）と同様に、動機の読み取りが物語解釈に影響を及ぼすことが示され、道徳の時間の中の指導においても、動機の読み取りが重要であることが明らかになった。そこで第5章（研究2）では、道徳授業の参与観察から、動機の読み取りが不十分であった小学校6年生の児童1名に対して、教師が1授業内でどのように動機の読み取りを支援しているのかについて探索的に検討をおこなった。授業談話を分析した結果、児童は、自身の経験がうまく利用できない時に、不十分な動機の読み取りをおこなうことが示され、教師はそうした児童に対して、物語と同構造の児童の経験を与え、アナロジー推論に用いるソース（推論の基盤）を作らせることで、ターゲットとなる登場人物の動機を抽出させる支援をおこなっていた。そこで、第III部ではアナロジー推論を利用した支援の効果について検証することとした。

第III部（第6章～第9章）では、アナロジー推論が動機の読み取りに与える影響について準実験と事例分析により検討した。第6章（研究3）では、小学校6年生の児童を対象とし、研究2で示されたアナロジー推論例を与える支援方法の効果を検証するとともに、物語と類似した状況を想起させる支援方法の効果についても検証した。具体的には、(1)物語を読んで動機を読み取る条件（ $n = 41$ ）、(2)物語と類似した経験や事柄を想起してから動機を読み取る条件（ $n = 40$ ）、(3)外的にアナロジー推論例が与えられてから動機を読み取る条件（ $n = 39$ ）との間で、登場人物の動機の読み取りに違いが現れるのかどうかを検討した。その結果、アナロジー推論例を提示し

た条件において、動機の読み取りを達成した児童の比率が他の 2 群と比較して高いことが示された。一方、児童が自分で類似性を見出して想起した経験は、アナロジー推論を達成するための適切な足場かけとしては機能しにくいことが明らかになった。本結果から、物語の構造と類似した状況を想起させた場合、児童は何らかのポイントで構造の類似性を逸脱した類似状況の想起をおこない、それがアナロジー推論を達成する上でのつまずきに繋がるのではないかという仮説が提起された。この仮説を受け、第 7 章（研究 4）では、道徳の時間における児童の類似状況の想起に着目し、児童たちが物語をどのように理解し、類似状況を想起しているかについて検討した。具体的には、小学校 6 年生の 1 学級（ $n=33$ ）の 3 時間の道徳の時間を対象に、授業後の感想課題で自分の類似経験について想起させ、児童が類似経験と物語をいかに関連付けているのかを検討した。その結果、児童は、読み物資料の内容や資料を通して考えたことと自身の生活経験を関連付ける際に、資料解釈の中で読み取った動機を含めずに物語を構造化し、それをもとにして経験を想起している可能性が示された。また、物語構造との類似状況としては、「行動（ex. ゴミを捨てる）」に着目して類似性を見出す傾向が認められ、児童は、物語と自分の経験とを結びつける際に、動機などの不可視の要素を見落とす可能性が示唆された。そこで第 8 章（研究 5）では、実際の小学校 6 年生（ $n=34$ ）の 5 時間の道徳の時間を対象に、児童が自発的にアナロジー推論をおこなった場合に、教師がどのように動機の読み取りを支援しているかについて、談話データから検討した。その結果、教師は児童の提示する「未完成」なアナロジー推論を促すために、意識しづらい（あるいは、見落とされている）不可視の動機の部分を明確化させる方略をとっていることが示された。この方略によって、児童は動機を明確に意識することができ、動機の要素を踏まえた上で自身のアナロジー推論が適切かどうかについて吟味することができていた。そして、第 9 章（研究 6）では、動機の読み取りのために適切なアナロジー推論が学級で共有された際に、どのような相互行為が生起するのかについて検討をした。小学校 6 年生 1 学級（ $n=34$ ）の道徳の時間 1 授業の参与観察をおこない、談話と児童のワークシート分析をおこなった結果、他者が発話したアナロジー推論が誘因となって自身の経験ソースを想起したり、他児童のアナロジー推論を利用して動機の読み取りをおこなったりと、相互行為の中で探索的に登場人物の動機の読み取りが深められていたことが確認された。さらに、児童間でアナロジー推論の内容が共有されることにより、それまで気づかれていなかった新しい共通項が発見されるなど、相互行為を通してアナロジー推論の内容が展開していくという道徳の時間におけるアナロジー推論の特徴も明らかになった。本結果は、個人内に閉じた思考として捉えられてきたアナロジー推論が他者に開かれた際に、どのような学習過程に結びつくのかという教育効果の一端を明らかに

するものといえる。

第IV部の総合考察では、これまでの結果をまとめて総合的な考察をおこない、本論文の意義を整理した。児童と読み物資料、教師の支援を含む、道徳の時間に生起するアナロジー推論の過程モデルを Figure 1 に示す。

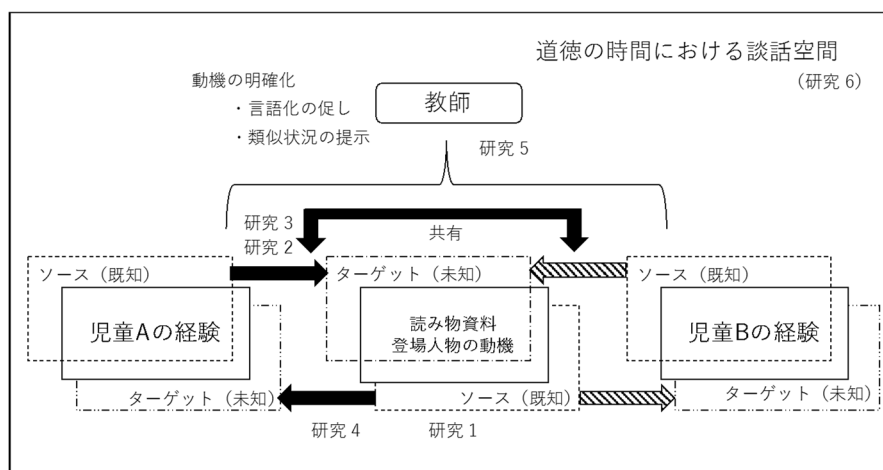


Figure 1 道徳の時間に生起するアナロジー推論の過程モデル

児童たちは既知である自分の経験をソースとして、未知のターゲットである登場人物の動機の読み取りをおこなう（研究1，研究2）。その際に、児童は自分の経験を用いたアナロジー推論をおこなうが、本論文では類似状況を想起できない、あるいは、想起できても動機の読み取りなどの問題解決に利用できる形ではない、といった児童のつまずきが確認された。そのため、教師は、経験ソースからターゲットを理解するアナロジー推論の支援として、（1）類似状況の提示（ex. 類似経験の想起の促し、架空の経験場面の構築）、及び（2）動機の言語化の促しをおこなっていた（研究5）。ただし、（1）に示すように、類似した経験の想起を促す場合は、単に想起するように促すだけでは不十分であることも示された（研究3）。また、こうした類似状況を想起することの困難さは、経験ソースから登場人物ターゲットの方向でのアナロジー推論のみならず、登場人物ソースから経験ターゲットの方向においても確認された（研究4）。本結果は、経験ソースから登場人物ターゲット（あるいは、その逆）のアナロジー推論を授業内でおこなっていく際に、動機に注目し、意識化する支援を児童が必要とすることを示唆するものである。また、話し合いを通して他児童がおこなったアナロジー推論を聴き、自分のアナロジー推論に利用する児童が認められた（研究6）ことから、道徳の時間の中で、動機を意識化できるように教師や他児童の支援を受けながら、経験と資料を関連付けていくことがアナロジー推論に基づく道徳の読み物資料の理解を深める上で重要であることが示された。